

## 幼児教育専攻学生のもつ「表現」観について

栗原 泰子

### A Research of Image of “Expression” Captured by College Students in Early Childhood Education

Yasuko KURIHARA

This research focus on image of “expression” which is captured by college students in Early Childhood Education. The research methodology is a questionnaire. I ask them what is image of “expression” in general and what is “impression” for yourselves. As the result I find out the students have two different images about “expression”: one is representation as art, and the other is their expressional techniques.

#### 1. はじめに

幼稚園教育要領の改訂により、保育内容の再編成が行われ、平成元年より保育内容領域「表現」が新たに保育現場に導入された。この領域は、改訂以前の領域の考え方から大きな考え方の転換を保育者が迫られているものととらえることができる。なぜなら、この領域はこれまでの領域よりも広く子どもの活動をとらえようとしているからである。短絡的に従前の領域「音楽リズム」や「絵画製作」といった領域が統合されたものであるというような考え方では、対応しきれない部分が含まれているのである。

一方、幼稚園教師を養成する養成校の新しい幼稚園教育要領あるいは、幼稚園教師の教育職員免許法の改訂などに大層する仕方を見てみると、保育内容の領域「表現」に関しては、従来の「音楽リズム」や「絵画製作」などの流れをそのまま残して、授業科目を「表現Ⅰ」「表現Ⅱ」などと分けたり、あるいは「音楽的表現」「造形的表現」「身体表現」などと分けて対応しているのが現状である。これは従来の保育内容の領域を担当していた、音楽、リズム、造形などの教員をそのまま新しい保育内容の領域の担当者とする必要があるというような人的な背景

があるために生じている状況である。これは、他の4つの新たな領域においてはみられない現象だが、領域「表現」においては、前述したように、短絡的に従来の「音楽リズム」や「絵画製作」が統合した領域であるというような受けとめ方も可能であったために生じた現象である。これらの状況は今後解消されていくと思われるが、そのためにもこの領域「表現」を学生に教授する側の人間も、また保育の現場で子どもを指導する保育者もどのように考えていったらよいか、という問題が大きな課題となっている。

養成校の多くが2つあるいは3つに分けて教授される保育内容領域「表現」について、今後どのようにこの内容を統合化あるいは総合化をはかったらよいか、実際に「表現」の授業を担当する者として考えていくべき課題であると思う。そこで、このことを考えていく糸口として、学生自身はこの「表現」をどのようにとらえているかを探ることを目的として本研究を行うこととした。

## 2. 研究目的

本研究においては、保育内容の領域「表現」とは離れて、その関係の授業を受ける前の学生が「表現」そのものについてどのようなとらえ方をしているのかを明らかにすることを目的とする。具体的には、「表現」そのものを学生はどのようにイメージしているのか、また自分自身にとって「表現」はどのようなものであるという認識をしているのかについて検討を行うこととする。

そして、学生が持っている「表現」観から出発し、学生自身がそれぞれもっている「表現」というイメージと保育内容の領域「表現」の教授内容の関連について考察していくこととする。

## 3. 研究方法

### <調査方法>

- ・質問紙調査
- ・調査項目

- (1)「表現」からイメージすること
- (2)自分自身にとっての「表現」とは

上記の2項目について自由記述

幼児教育専攻学生のもつ「表現」観について

<対象>

K女子大学教育学部幼児教育学科3年52名

<実施日>

1993年4月15日

保育内容領域「表現Ⅰ」「表現Ⅱ」の最初の授業日

<分析方法>

自由記述の記述内容を大きく具体的な活動の記述と抽象的な記述とに分類する。

2つに分けた記述内容それぞれについて、細分化した分類を行う。

4. 結果及び考察

(1) 「表現」からイメージすること

表1 具体的な活動

分野	具体的な活動	数	%
舞踊	身体表現（ジェスチャーなど）	11	10.8
	踊り（バレエ、ダンス）	10	9.8
	創作ダンス	5	4.9
	小計	26	25.5
音楽	音	2	2.0
	音楽	10	9.8
	歌	4	3.9
	合奏（ピアノ）	3	2.9
小計	19	18.6	
美術	絵画	13	12.7
	造形（工作、造形、彫刻など）	5	4.9
	小計	18	17.6
文学	ことば	8	7.8
	文章（詩、短歌、俳句など）	7	6.9
	小計	15	14.7
演劇	演劇	5	4.9
	演技	3	2.9
	ミュージカル	3	2.9
	小計	11	10.8
感情 表情 その他		5	4.9
		4	3.9
		4	3.9
合計		102	99.9

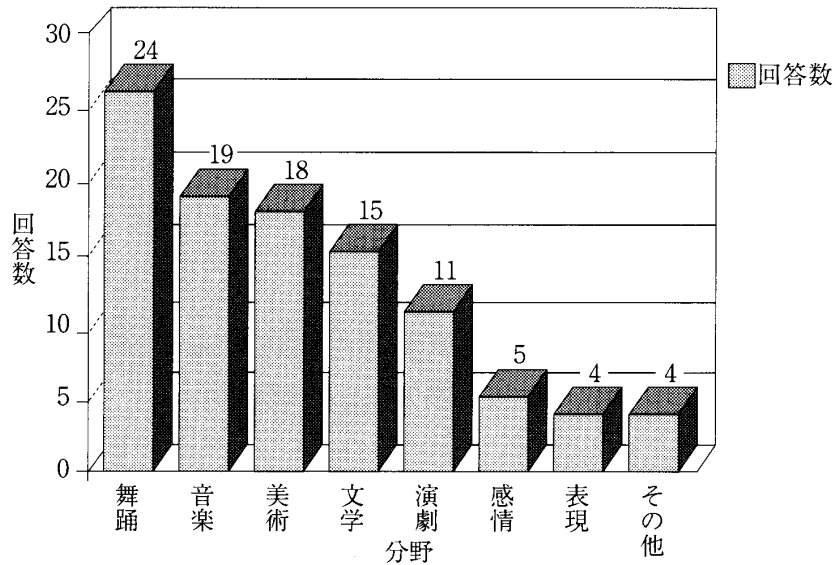


図1 具体的な活動

表1および図1の「具体的な活動」は、調査項目(1)に対する学生の回答をまとめたものである。分類にあたっては、分野のカテゴリーについては、芸術学における学問分野の分類を参考に立てた。その分野ごとの具体的な活動についてのカテゴリーは、学生があげた具体的な活動名を参考にカテゴリー化した。

これをみると、学生たちは「表現」という言葉から、具体的には何らかの形でできあがった作品をイメージしていることがわかる。その中でも、まず舞踊に関するもの、具体的な活動としては、身体表現(ジェスチャーなどを含む)、踊り(バレエやダンスなど)や創作ダンスをあげている。この舞踊の分野に分類された回答数が26で全体の回答数の25.5%となっている。ついで、音楽の分野に分類されるもの、具体的には音楽、歌、合奏、ピアノ、音などをあげている。音楽に関する記述数は19で、全体の18.6%となっている。以下、美術の分野(絵画や造形)18(17.6%)、文学に関する分野が15(14.7%)となっている。「表現」という言葉から、そこには、いくつかの表現手段による表現活動、言い換えれば、表現をいくつかの媒体を利用して行うものという認識がみられる。例えば、音楽に合わせながら、自分自身が動くことや、歌を歌ったり、楽器を演奏するというように、表現にあたって利用されるものが、文章を書くことや絵を描くというような1つの手段だけではなく、複合されたものとしてとらえる傾向があるということである。

以上のように、一般的に「表現」と問われた場合、学生は作品として完成されたものを「表現」としてとらえていることがわかる。したがって、このことから、学生は、自分が感

幼児教育専攻学生のもつ「表現」観について

じたことや考えたことなどを何らかの方法で表すことの方に意識が向かっているということが出来る。このように学生が「表現」という言葉からイメージする活動は、芸術という領域の中に含まれているものとその88%が重複していた。これは学生が一般的に「表現」ということを考える差異に、その上位の概念として芸術作品、あるいは芸術に関連する分野をを想定していることのあらわれではないかと考えられる。

(2)学生自身にとっての「表現」について

次にこの「表現」が、学生自身にとってどのようなものであるととらえているかについてみてみることにする。表2および図2が「自分自身にとっての表現についての意見をまとめたものである。

学生自身にとっての「表現」を考えた場合に、一般論としての「表現」を考えるだけではな

表2 自分自身にとって「表現」とは

項目	具体的な記述内容	数	%
自分自身を表す手段として	感情表現	46	46.9
	何らかの形で表す	25	25.5
	小計	71	72.4
コミュニケーション手段として	相手に自分の考えを伝える手段	14	14.3
	自分を理解してもらうための手段	5	5.1
	自分をアピールする方法	3	3.1
	小計	22	22.5
その他		5	5.1
合計		98	100

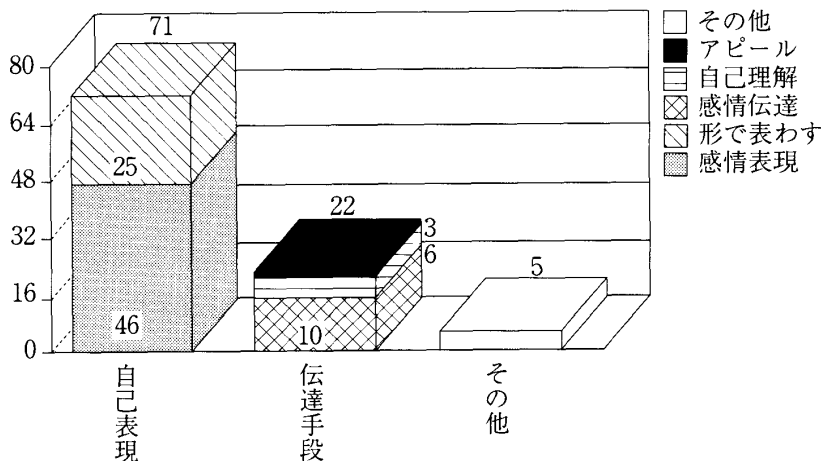


図2 自分自身にとっての表現

く、そこに自分自身という条件が加わるために、質問項目(1)の場合とはまったく異なった回答となっている。自分自身にとってという条件が加わることによって、学生は自分にとって「表現」とはどのようなものなのか、と自分自身の内面に問いかけをし、回答をしているものと思われる。したがって、この場合には、回答するにあたり、内省的思考が行われ、先の質問(1)の場合のように自分自身の既有体験や知識から想起する内容を回答するのは、その思考過程がまったく異なってくるのである。そのため(1)の場合のように、できあがった作品を「表現」ととらえている学生は非常に低い割合を示すこととなったと考えられる。

質問項目(2)の回答も大きく2つに分けられた。その1つは、自分自身を表す表現の手段として、というとらえ方である。もう1つは、他者とのコミュニケーションの手段として、というとらえ方である。前者の自己表現の手段としてと回答した者は、全体の記述数の72.4%を占めている。その具体的な内容としては、「言葉、表情、行動などによって表現する」、「喜怒哀楽などを表すこと」、「体を使って感情を表すこと」など、自分自身の感情表現であると記述している学生が46.9%となっている。ついで、自分が感じたり思ったことを何らかの形で表すものであるとしている25.5%となっている。これらに分類されている記述の多くに「表情」や「感情」という単語が使用されていることから、多くの学生が、自分自身にとっての「表現」を考えた際に、自分自身の感情面から出発するものであり、それらを何らかの形で自己表現することであると位置づけていると読みとることが可能である。そして、自分自身の考えや感情を表す手段であるとともに、他者とのコミュニケーション手段として重要であると考えていることがわかる。

後者のコミュニケーション手段として考えている学生の記述の中には、相手に自分の感情や考えを伝える手段として考えている記述と、自分を他者に理解してもらうための手段として考えている記述が見られた。

具体的には、顔の表情や話し方、行動など、日常生活の中で、他者と相互交渉していく際に、行動面に現れることが、表現活動であるというとらえ方をしているのである。それらをどのような形で表現するかについては、言葉や表情、行動などに関する記述が多くみられている。また、音楽や絵、詩など自分自身が制作して楽しんでいるものをあげている学生もみられた。

これらのことから、学生は自分自身にとっての「表現」を考える際に、その表現が出現するもととして、自分自身の感情があり、そこから自分の生活全般について「表現」している場面を想定して回答していることが明らかになった。例えば、「自分自身は表現が下手なので上手になりたい」とか、「もっと自分自身を表現する方法を学びたい」などという記述などがみられ、自分自身を「表現」することには自信がないが、そのことについては、向上心をもってい

ることも明らかになった。

今回の調査では、「表現」という同じ言葉を質問の中に入れて提示したわけだが、一般的な「表現」を問う場合と、個人的なレベルでの意見を求める場合とではその答に大きな違いが生じた。この違いは、前述した学生自身というフィルターがかかっているために生じたものと考えられる。質問項目の(1)「表現からイメージすること」では、一般論を問いかけるもので、そこでは学生はこれまでの体験の中から、知識として蓄積してきた「表現」について、表現を活動としてまとめたものとしてとらえていた。質問項目(2)の「自分自身にとっての表現」では、回答を考える際に、自分自身に問いかける形で内省的な思考をしていることから、そこに2つの答の違いがみられたと考えられる。

## 5. 「表現」の概念について

「表現」という概念について、美学や芸術学の分野においてどのようになされているかを調べてみると、その定義は非常に曖昧なものとなっている。渡辺護は『芸術学』（東京大学出版会：1975）の中で、表現の意味について次のように述べている。

「表現」という日本語は多義的である。というようりむしろきわめて曖昧に用いられている。そこでここでは、芸術の基本原理をあらわすのもっとも適切なように意味を規定する必要がある。

芸術家の創作行為においては、芸術家が外界の事物を描写再現しようとする契機と、芸術家の内界つまり心の中にあるものを外化しようとする契機とが区別される。西欧の美学に於いては前者を *representation* と呼び、後者を *expression* と呼んで、区別してきた。ところで「表現」という日本語は一般に後者の *expression* の訳語とされている。*Expressionism* を表現主義と訳していることもその一例である。

上記の文章から、「表現」の主体を芸術家とした場合、その創作行為の契機となるものが芸術家の内面にあるか外側にあるかによって、*expression*（これを渡辺は「表出」と訳している）と *representation*（これを「再現」と訳す）とに区別している。しかし、*representation* が「表現」とされている言語もあり、言語間の共通の概念も統一されていないことから、「表現」の概念は曖昧なままになっているとも述べている。そこで「再現」と「表出」については、きちんと区別することが必要だとして、次のように規定している。

外界の事物を描写する原理的作用を再現 representation と呼び、内的なものを外化する原理的作用を表出 expression と呼ぶ。この両者を総括して、芸術家が作品の中に何らかの意味内容を客観化する作用を「表現」とよぶこととする。表出と再現とはある意味でたしかに対照的な作用ではあるが、のちに述べるように、芸術創作に於いては結局原理的にも統一されるべきものであり、このように統一されたひとつの名称を与えることは、可能であり、妥当でもあろう。

渡辺の規定によると、「表現」には「再現」と「表出」の両者を総括し、芸術家が作品の中に何らかの意味内容を客観化する作用を「表現」とよぶこととするとして、「表現における2つの側面について述べている。この「再現」と「表出」について、は具体的にはどのように概念規定されているのであろうか。そのそれぞれについて、渡辺は次のように記述している。

#### <表出>

Expression(表出)とは、元来 ex(……から)と pression(押す)から成り、つまり外へ押し出すという意味であり、農業用語として果汁をしぼり出すという意味では今日も用いられている。芸術について言えば、何らかの内なるものを外へ押し出すという意味である。

心理学によるまでもなく、人間は内的なるものを外へ出したいという表出衝動を持っている。ふつうの場合これは内的なるものを他人に伝達したいという欲求から起こるが、それだけではなく、内に鬱積したものを排出する効用を持つときもある。悲痛の感情にさいなまされているときに、一人ひそかに泣くだけでも、気分はいくらか楽になるものである。

他者への伝達が行われる表出も、その伝達が意図的でない場合と、意図的である場合とがある。悲しい気持ちをいだいているとき、そのことが自然に顔にあらわれて、それを他人が感じとるのは前者である。芸術の表出にはこのように伝達が作者の意図によるものと意図しないものとの両方があるが、いずれにしろ表出は伝達されるべきものである。

#### <再現>

再現 representation とは何らかの意味ですでに存在するものを芸術のうちに提示することである。……

(中略)

……再現とは描写ではない。描写は再現を実現するための行為ではあっても再現それ自体ではない。再現とは、再びそこにあらしめる re-present こと、すなわち事実象徴を実現さ



すことにほかならない。そして、そこに事実として再び現前することのできるもの—それは生命にほかならない。その物や形や色などをいかにその物の通りに描き出してみても、それだけでは真の再現ではない。再現とは、われわれが現実界に於いてすでに感得したことのある「生命」なるものを芸術作品に再びあらしめることなのである。

渡辺の規定はあくまでも芸術家が創作行為をなす際における「表現」についての概念規定である。しかし、この「表現」における「再現」と「表出」については、幼児教育における保育内容領域「表現」とも重なる部分が見られる。

幼児の造形教育分野の研究者である林建造は「表現」について、『新教育学大事典』の中の「表現」という項目で、造形的な立場から「表」と「現」とに分けて述べている。

表とは、頭の中のイメージを中心として、いわばヴィゴツキーの内言に等しい物(漠然としたものがややはっきりイメージされること)で、現とは現物、現金などのようにそのイメージを外に出し、他人にもわかるように(視覚化、形象化、音声化)したもので、言葉なら内言に対して外言ということになる。

前述の渡辺の「表現」に関する概念規定とあわせて考えてみると、「表」と「表出」、「現」と「再現」とを同様に読み替えてみる事が可能であることがわかる。

本研究における学生の「表現」に関するイメージも、この概念規定と同様に2つの側面からとらえられていた。つまり、「表現」についてのイメージにおいては、「表出」と「再現」とが融合した芸術家の創作行為に近い「表現」としてとらえていた。これは、学生の意識の方向が作品として完成したものを「表現」としてイメージしていたことからわかる。そして、自分自身にとっての「表現」については、「表出」としてとらえており、そこには単に自分自身の感情や思いを表出するだけでなく、他者への伝達をも含めて考えていることがわかった。

以上のように「表現」を「表出」と「再現」という2つの対照的な側面からとらえ、それが統合されて「表現」活動へとつながっていくという筋道は、理論的な部分だけではなく、学生のイメージの中にも存在することが明らかになった。

## 6. 幼児教育における「表現」について

幼児の表現活動を考えた場合、そこには何らかの形としてできあがったものに向けて活動を

展開する場合もあれば、その時に取り組んでいること自体を楽しむだけという場合もある。言い替えれば「表出」から「表現」へと展開していくもの、「表出」だけで終わってしまうもの、最初から「再現」することを目的として活動に取り組むものなどが考えられる。

したがって、幼稚園教育においても、幼児が何を感じ、何を考えてそれをどのように表しているかというところに、もっと着目すべきであろう。「幼稚園教育要領」の保育内容領域「表現」のねらいは、「(1)いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ (2)感じたことや考えたことを様々な方法で表現しようとする (3)生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」となっている。しかし現状においては、音楽や造形などというような領域にこだわりすぎて、保育者の意識がどうしても作品を完成させることに向いてしまいがちになることもある。幼児は作品を作り上げる際にも、そのきっかけやその途中の活動も含めて表現活動として楽しんでいる。音楽的な表現活動や身体表現活動、あるいは造形的な表現活動などを考えてみると、あらかじめ保育者がその表現方法を提示して、いわゆる「再現」にもいたらない単なる「描写」をさせることを表現活動として位置づける場合もみられる。このような状況が幼稚園教育における「表現」に関する活動での問題点となっていると思われる。

子どもたちが内面に感じているものを誰にみせるわけでもなく表出させて楽しんでいる。あるいは、経験したことを感動的に受けとめ感性を豊かにしていったり、イメージをふくらませていくことの方に、つまり「表出」の方に力が向けられるべきであろう。このような感性やイメージを豊かにしていくためにはどのようにしたらよいかを考えがえていく必要がある。これは保育者にとっても非常に難しい問題であるが、「表現」を「表出」と「再現」という2つの側面からとらえることによって、言い換えれば、幼児の生活そのもの、遊びそのものが表現活動であるという総合的なとらえ方をすることによって解決の方向が見いだせるのではないかと考える。つまり、「表現」を音楽的、身体的、造形的というような分類でとらえるのではなく、子どもの遊びを「表現」へと統合していく要素としてとらえることによって、子どもの感性や「表出」の部分あるいは「再現」の部分の融合が図っていけるのではないかと考える。

## 7. まとめ

今回の調査結果から、学生が自分自身にとっての「表現」としてとらえている事柄は、まさに幼児の幼児の表現活動を読みとっていく際に有効な手段へとつながるものとしてその関連をとらえることが可能であった。なぜなら、表現活動の背景にあるものは、まさに人間が何かを感じ、考え、それを表したいという欲求、つまり、「表出」が基本となっているからである。

学生自身が感じている表現したい思いを、幼児理解へとつなげていくことが、幼児の表現活動の理解へと通じていくものと考えられる。幼児の表現したい思い、それが何らかの形をとって表される際に、友だちの表現活動を模倣したり、保育者の提示するものを模倣することから、表現方法を蓄積し、それを自分なりにアレンジしていくというような「再現」(表現)へと展開していくのである。

このアンケートを行った後、「表現Ⅰ」を実際に担当する中で、いくつかの試みを行った。その1つにグループで行う活動として、自由に表現することを楽しむという課題を与え、その表現手段や内容については、学生の任意にまかせて、いわゆる創作活動を行った。学生たちが発表したものは、ほとんどのグループで身体表現活動や、劇的な活動であった。このことから、学生は「表現」を、芸術家たちの創作行為としての表現活動としてとらえていることがわかる。そこには、自分自身にとっての表現というような要素は見られず、すでにあるもののコピーあるいはアレンジをするという方向での活動が展開されていた。こういったいわゆる「再現」の色彩の強い表現活動を「表出」から出発した「再現」との融合されたものとしての表現活動へとつなげていくために、どのような援助、あるいは教授ををしていったらよいのかというものが課題として残っている。

しかし、今回の調査結果に現れたように、学生はすでに「表出」としての表現観をその内にもっており、他方「再現」としての表現活動についてもイメージしていることから、幼児の表現活動を自分自身をも含めた表現活動としてとらえるアプローチが可能であるとの示唆を与えることができた。今後、学生自身の表現観と幼稚園教育における表現との関連について、たえずフィードバックしながら授業を進めていく必要性を感じた。

## 引用文献

渡辺護『芸術学(改訂版)』東京大学出版会：1975, pp. 83-90.